

平成31年度第1回概説部会議事録

日 時：平成31年4月4日（木）14:55～15:45
場 所：赤れんが庁舎1階 文書館打合せ室
参加者：桑原編集長、平野委員、谷本委員、榎本
委員、川上委員、蓑島委員
事務局（蘆原・中谷・伊藤）

1 開 会

2 議 事

- (1) 概説の編集方針についての検討
- (2) 委員の分担について
- (3) その他

3 閉 会

1 開 会

【桑原部会長】

- ・ ただいまから北海道史編さん委員会平成31年度第1回概説部会を開催いたします。
- ・ 本日の議題は、ご案内のとおり、1番目に、概説の編集方針についての検討、2番目に委員の分担について、これは委員の補充の話が中心になると思います。3番目がその他となっており、この順に話を進めてゆきたいと思います。
- ・ なお、本日の委員の出席状況は全員出席となっております。

2 議 事

(1) 概説の編集方針についての検討

【桑原部会長】

- ・ 議題1では、論点が3つ、まず1番目は「概説」の書名（誌名）をどうするか、2番目にボリューム、最後に叙述のレベルをどの程度に収めるか、この3つを中心に話し合っていたきたいと思います。
- ・ まず、「概説」の書名です。これは「概説」のサブタイトルという意味ではなく、より具体的な書名をつけていただくというものです。
- ・ なぜかと言いますと、この「概説」は、大量に作成の上、市販して、多くの道民が書店で手に取って気軽に買ってもらえるような形態や理解しやすい構成を想定しております。また単に概説編としてしまうと、「現代史」の部分の概説との誤解を受けることから、現代史を中心とする資料編、通史編からは独立した、親しみやすい書名が必要であると考えた次第です。
- ・ 参考までにどういうものが考えられるかという、「北海道の歴史」、「北海道のあゆみ」、「概説 北海道の歴史」、「北海道史概説」、「新しい北海道史」、「新説 北海道史」などが考えられます。どういう名前がふさわしいか、ご意見をお寄せください。

【靄原室長】

- ・ この会議の始まる前に、蓑島先生から「北海道史クロニクル」はどうかのお話がありました。

【蓑島委員】

- ・ 最近、千歳市が「千歳鏡」とずいぶん趣向を変えた誌名を考えたようです。「北海道史クロニクル」あるいは「北海道クロニクル」というのは、ジャーナリスティック的過ぎるかもしれませんが、書店で多くの人に手に取ってもらうには考えられるかなと思い、提案しました。ご検討の材料にしていだければと思います。

【桑原部会長】

- ・ 今までにない名前ですね。人目を引くかもしれません。書名にカタカナを使うのはどうかと言われませんか。

【蓑島委員】

- ・ 目立つ気がします。ちなみにクロニクルとは年代記という意味です。

【川上委員】

- ・ 自分で考えたのは、案のような通り一遍のものだったので、新鮮な感じがしています。

【平野委員】

- ・ 私も、独立して出版することも考え、本編と区別された名前として、独り立ちした名前として使うには、こういう名前の方がいいと思います。私の考えたのはやはり先ほどの例のようなものばかりで、他に概説に代わる言葉が見つからなくて、最初にこの名前を聞いて感心しましたので、これでいいと思いました。

【桑原部会長】

- ・ 蓑島先生の案は、感覚が新しいですね。

【蓑島委員】

- ・ 一般の書店に並べるのなら、こういうのもありかなということで、案として出させていただきました。

【平野委員】

- ・ 書名は叙述のレベルとも関わってきますが、レベルの方も自治体史そのものというよりも、全般的に判りやすいような内容になるとと思いますので、それを踏まえてもこの名前がいいと思います。

【桑原部会長】

- ・ そうですね。書名はそれにふさわしい内容でなければならないです。

【蓑島委員】

- ・ 他には、トーンダウンしますが「北海道の歩み」などを案として考えていました。

【桑原部会長】

- ・ それでは旧態依然としています。では、蓑島先生のご提案の線でいいきましょうか。

【榎本委員】

- ・ 反対ではないですし、例に載っているようなものしか思いつかないのですが、副題風に本の中に書いてある特徴的なものとか売り物にしたいテーマなどを3つくらいつなげられる方がいいかな、今回の「概説」の代表的なテーマを挙げられる方が、つかみやすいかなと思います。
- ・ 一般名称を書くと捉えられにくく、クロニクルもそれに近い感じがするので、副題でもう少し、つかまえるものがあつた方がいいと思います。今は何が言葉としていいかはわかりませんが、概説が出来上がってくる過程の中で浮かび上がってくるものを入れるとか、江戸時代以前と明治以降で分けるのならば、それぞれの特徴を1つずつ出して、後ろにくっつけるということの方がいいかなという気がします。

【桑原部会長】

- ・ それは、原稿が出来てからでもいいのではありませんか。途中でも思いついたものをつけてもいいですし。当面はこれでいこうかなという話です。最初からサブタイトルを思いつきますか。

【榎本委員】

- ・ いいえ。まとめながらということになると思います。

【谷本委員】

- ・ 全体のタイトルは6月に決まるのですね。今のところの候補はありますか。

【蘆原室長】

- ・ 全体のタイトルは、まず企画編集部会の方で案を出して、6月の委員会で決定となります。概説はメインタイトルだけで6月の委員会に十分間に合います。

【谷本委員】

- ・ 私が気にしていたのは、全体のタイトルが「戦後北海道史」とかになってくれれば、「北海道史クロニクル」でいいと思いますが、全体の方も「戦後」がなくて「北海道史～」のように、それだけを見てもいつの時代のことを言っているか分からないものになってしまうならば、副題で、例えば「古代～現代まで」と入れた方が確かにいいかもしれません。
- ・ この方針でいくことにしても、全体のタイトルが決まった時点で、全体のタイトルとも差別化をしてわかりやすくした方がいいと思います。

【桑原部会長】

- ・ 全体のタイトルはたぶん「北海道現代史」というようなものになりそうな気がします。

【谷本委員】

- ・ それならこれでいいと思います。現代史に限定されるので。その概説ではないということが分かるのでこれでいいと思います。

【桑原部会長】

- ・ それでは蓑島先生ご提案のタイトルでいきましょう。
- ・ 次に、議題1の中の2番目のボリュームの問題です。昨年の親委員会では一応1冊で600頁程度という形で仮に諮ってきたわけです。この概説部会ではいろいろな意見が出されてきましたが、その中で、1冊600頁程度にするとしても、厚紙やカラー紙だと1冊300～400頁程度であろうと考えられわけです。1冊案と2冊案が考えられる中で、概説部会の大勢は、2冊でいこうというご意見が主流のように聞こえましたし、小部会も2つあるので、1冊より2冊の方が望ましいという気もしますが、いかがでしょうか。
- ・ 3冊も4冊もつくることは予算上無理だということですので、なんとか2冊まで予算をがんばって取ってもらいましょう。

【榎本委員】

- ・ 600という頁数があり、手に取って欲しい対象が道民一般となっていますが、たぶん普通の人は600頁もあつたら手にも取らないでしょう。

【川上委員】

- ・ 道新出版社のは500頁くらいずつです。

【桑原部会長】

- ・ 普通は1冊の方がいいのです。

【榎本委員】

- ・ 前にも言いましたが、観光ボランティアの方々には200頁を超えると触ろうともしないし2000円を超えたら買おうともしませんから、道民一般の部分がある程度あやふやにしておかないと、道民が親しく手に取ってみるというイメージにはならないのではないですか。

- ・ ポリュームは次の叙述レベルにも関わってきます。道民が親しく手に取ってみるというのをお題目として入れる分にはいいですが、新札幌市史の時も、当初は中学校あるいは高校レベルの通史を書いていくということだったのですが、通史に入る前に、それは無理だという話になって、資料編の時点から研究者向けくらいのレベルのものに切り替えたはずです。でも当初の方針はそのまま枕詞風に付け続けていました。現実には、600頁が500頁になっても似たようなものだと感じるので、書く側が意識しておかないと、誰も手に取らないものになりかねないと思います

【桑原部会長】

- ・ そのためにいろいろと創意工夫が必要だと思います。どうやったら手に取ってもらえるかということで、当然考えられるのは文字だけではなくて図版や写真を多く入れるとか。
- ・ この前、教科書の話を出された方がいたので、事務局にお願いして高等学校の日本史の教科書を用意してもらいました。なかなか難しいことがたくさん書いてあります。このレベルの内容で書くのはなかなか手強いです。

【平野委員】

- ・ 「日本史B」はすごく細かいです。

【榎本委員】

- ・ かとって「日本史A」は易しすぎておおざっぱなことしか書いていない。「日本史B」は知識中心になっている。

【谷本委員】

- ・ 前回の会議では、ビジュアル中心か、それとも文字・叙述中心かという議論がありました。榎本先生が本体がない概説はないのではないかという問題提起をなされて、ビジュアル中心もいいけれども、今回は戦前以前に関してはしっかりした叙述がないので、きちんと叙述すべきではないかという議論になったのではないかと思います。それでもギリギリ多くしても2巻だろうという議論に話し合いの中ですべて終わっていると思います。
- ・ 今、榎本先生が最初におっしゃった話は、それとは全然違う議論になっていて、ボランティアの人とかのために、簡単なパンフレットのような形で30頁から40頁のものを作るとしたら、またビジュアルなものに戻す必要があると思います。

【榎本委員】

- ・ それがいいというわけではなく、600頁なりが2冊になった時は一般向けではなくなってしまい、道民に手に取ってもらえるものにはならなくなるのではないかと思います。

【谷本委員】

- ・ せっかくこういう場ですから、どちらにするかをまた決めればいいのかと思います。前はしっかり書く方がいいのではないかという結論で終わったと思います。けれども、今、また、やっぱりそれだと道民に手に取ってもらえないのではないかというご意見が出たので、そうすると根本的にもう一度議論し直す必要が出てくるのではないかと思います。
- ・ そこはビジュアルな例えば高校の教科書のようなものを作るのが私たちの仕事な

のか、それとも前近代あるいは戦前の部分をしっかり道庁の見解として歴史認識を示すのが仕事なのかをはっきりしないと、これからまた同じ議論が蒸し返される気がします。

【靄原室長】

- ・ 前回の議論で決着は付いたと思います。高校の教科書も叙述タイプに入ると思い用意しました。叙述ですけれども、一方で榎本委員のおっしゃったように最近の大人も子供もただの叙述だけでは敬遠してしまうところがあって、最近の教科書はこんなに図録があったり原資料をカラフルに載せていたり、トピック的な囲み記事があったりというところで引っ張っていくような通史の書き方なのだなと感じたところです。

【谷本委員】

- ・ どちらにするかで作業の仕方が全然違ってくると思います。文字中心にきっちり叙述するのと、いろいろとトピックを工夫したりどこどこ博物館を訪れてみようという記事を作ってみたりするのでは、根本的に違う作業だと思うので、そこは最初に決めておかないと、何をすればいいのかわからなくなって困ります。

【桑原部会長】

- ・ 榎本委員の主張はこの前もそういうことをおっしゃられていたけれども、それは一応、しっかり書き込むということを基準にして進めていいのではないですか。理解を深めるために写真を載せるなどいろいろ工夫が必要だと言っているのであって、皆さんも文字だけでびっしり埋めるということを考えているわけではないでしょう。やはり今の時代ですからビジュアルな要素も若干つけ加えないと手に取ってもらえないです。
- ・ 道民一般のレベルは目に見えないもので、中学生か、高校生かどのレベルが道民一般なのかを想定するのはなかなか難しいことですし、易しく書けばいいというものでもないです。道史協が出した『北海道史事典』はどのような人を対象に想定していたのですか。

【谷本委員】

- ・ 一般読書人ということです。

【川上委員】

- ・ あれはトピック型ではありますが、事典ですのでトピックの内容については詳しく説明しているので、一般道民であっても歴史を調べてみようという層を想定していました。資料編もあって、刊行になっている資料の一覧などは歴史に関心のない人にとっては必要ないですが、関心のある人で歴史をもう少し深く調べてみようという人を読者層として想定していたと思います。

【桑原部会長】

- ・ 今度つくる本は、タイトルが斬新なだけに、店頭に並べたときに手に取ってもらえるように、目次案を作るときに工夫しなければいけないと思います。

【榎本委員】

- ・ 文字だけというのは当然叙述上あり得ないですが、逆にビジュアル性を高くすると文字との対立関係になるし、レベルをどうするかに直接つながり、ボリュームと

も関係する。

- ・ 文書を入れてその中に関連の絵や写真や図を入れていって書くことになりませんが、一方、近世以前だけではなく近代も市町村史がたくさん出ているのでかなり変わっているし、それを選択するだけでもたいへんになっている。レベル的には少し高くしないと具体的に書いていけないのではないかと思う。

【桑原部会長】

- ・ それでいいのではないですか。

【蓑島委員】

- ・ 苫小牧市で平成15年頃に400頁位の「苫小牧のあゆみ」という冊子を出して、それまでのボリュームのある市史を出して時間が経ってから、その後のことも追加したものを出す必要があるということで、かなり叙述もかみ砕いてビジュアルも2ページに1枚くらい写真が入るような形で、先史から現代まで通史にして、なおかつ、先史の部分と八王子千人同心などの部分は研究の展開が著しいので新しい叙述に差し替えることができた。そういうものを見て、今回の概説の目指しているものに近いのかなと思っていたのです。今回の話をうかがって、「苫小牧のあゆみ」のような事例が最近いろいろな自治体から出ていますので、体裁とか図版とかボリュームとか、そういうものの1つの目安とか基準になるのかなと思いました。

【桑原部会長】

- ・ 概説は作業がある程度進んだ段階で、どういふようにすれば市販可能かということで、民間の出版社の編集をしている人にアドバイスを聴く機会を設けたいと思います。道民一般と言っても漠然としていますから、どういふふうになれば売れるかということを検討する機会を設けたいと思います。
- ・ 次にボリュームについてですが、1冊にまとまっている方が手に取ってもらいやすいけれども、戦前までの部分は通史の部分がないわけだから、1冊では分量が足りないのでどうしても2冊必要だという話が出てきていました。

【川上委員】

- ・ 最新の成果を入れて、特に現代編のないそれ以前の部分はしっかり書かなければいけないということで一致していると思うので、あとはどういふ人に読んでもらうか、読者層を想定してボリュームも決まってくると思う。逆に言うと叙述のレベルの方を考えてボリュームを決めていった方がいいのかと思うけれども、基本は、前近代と近現代との2冊が必要という方針でいいと思う。

【靄原室長】

- ・ これまで10年間の計画の中で1冊ということでしたから、先生方がどうしても2冊必要だというご判断だということで、市販の方法を工夫するなどして何とかならないか、検討してみたいと思います。

(2) 委員の分担について

【桑原部会長】

- ・ 次に議題2に入りたいと思います。この件の具体的内容は、前回、昨年11月

22日開催の第3回の時にも話題になりましたが、部会の現メンバーに加えて、さらに委員の追加を求める意見がございました。

- ・ その際には、全体的に委員の高齢化が指摘されまして、若手研究者を中心に委員を補充すべきであるとの意見もありました。このような意見を参考にしながらご意見をお出してください。
- ・ なお、これから委嘱するとすれば、調査研究委員あるいは調査研究協力委員ということになりますが、何れの委員も原稿を執筆することは可能です。調査研究委員というのは、所属部会における企画及び編集並びに担当分野における資料調査・収集を職務といたします。調査研究協力委員というのは、特定の事項に関する調査及び情報提供を職務とするもので、他の委員を補佐しその一部を分担する場合など、スポット的な参加が考えられております。どちらにするかは職務内容をどういうふうに委嘱するかで違うわけです。
- ・ 第3回の時には、前近代史小部会では、たしか蓑島先生から考古関係の委員として、〇〇〇〇氏のお名前が挙がっていました。この方だけでよろしいですか。

【蓑島委員】

- ・ 〇〇先生と同様実績のある方で、道職員でもある〇〇さんにもご協力いただけるのであれば、かなり大きな力になると思います。

【桑原部会長】

- ・ この事業に道職員が入られた場合はどうなりますか。

【蘆原室長】

- ・ 近美の学芸員の先生と博物館の小川副館長がなられていて、無償、旅費だけで、現職中は執筆料なしです。

【蓑島委員】

- ・ 〇〇先生と〇〇さんのお2人両方が入っていただけるなら、先史とか前近代の執筆に関してたいへん力強いことだと思います。
- ・ 時代区分ではお2人は極めて近いです。お2人とも考古のどの時期もたいへん見識をお持ちで造詣が深いです。〇〇先生には重い部分をやっていただき、〇〇先生と〇〇さんは仲も良いので自然に〇〇さんが補佐的な役割になるのではないかと思います。

【蘆原室長】

- ・ ご意向は我々から確認します。〇〇さんには協力委員として〇〇先生をサポートしつつ足りない分は執筆もという説明をします。

【桑原部会長】

- ・ 近現代史小部会の方では、私の方から提案したいと思います。1人目は西田秀子さん。元新札幌市史編集委員で、札幌女性史研究会の代表でございますが、親委員会の委員になっておられます。女性史とか社会・労働問題を中心にお詳しいので、委員としてこの部会に所属してもらいます。
- ・ 調査研究協力委員として、今、〇〇にいる〇〇〇〇さんが、土工部屋の問題に詳しいのでやってもらおうと思っています。
- ・ 谷本先生、北大に最近、近代の北海道政治史の論文を書かれている方がいらっし

やいませんでしたか。

【谷本委員】

- ・ ○○○先生が、特に政党政治史とか政治史についてこの3月にも1冊本を出されました。お願いすればころよく引き受けてもらえると思います。

【平野委員】

- ・ 私は西田さんも○○さんも存じあげていますのでよろしいと思います。

【桑原部会長】

- ・ 将来的に追加もあるでしょうが今回はこのくらいでいいですか。

【川上委員】

- ・ 目次などを作ってからこの分野はこの人という話が出てくればお願いします。

【桑原部会長】

- ・ 谷本先生、近世史では○○大学の○○先生はいかがですか。

【谷本委員】

- ・ お願いしたいと思います。

【轟原室長】

- ・ 西田さんは委員として、最初の○○先生は調査研究委員、その他の方は調査研究協力委員ということですね。アイヌ史の小川さんもこの部会の近現代の方で属していただいた方がいいですか。

【桑原部会長】

- ・ そうしてください。

(3) その他

【桑原部会長】

- ・ 今後のスケジュールですが、今月中に企画編集部会を開く予定でして、必要があればもう1回企画編集部会を開き、その後6月下旬に親委員会を開催する予定です。委員の任命手続きに2ヶ月程度必要であり、概説部会の次回開催は、親委員会終了後の7月頃の予定です。
- ・ 何かございますか。ほかにないようなので、第1回概説部会を終わります。ありがとうございました。

【閉 会】

(了)